


事項	大豆「おおすず」を6月中～下旬に播種する晩播栽培では条間を半分にすると省力・低コストで安定的な収量が期待できる										
ねらい	生産現場では、近年、経営規模の拡大により大豆の播種時期が遅くなる傾向が見受けられる。そこで、狭畦栽培により6月中～下旬播種でも省力・低コストで安定的な収量が期待できることを確認したので参考に供する。										
指導 参考 内容	<p>1 「おおすず」の6月中～下旬における晩播狭畦栽培法</p> <table border="1" data-bbox="360 551 1414 676"> <thead> <tr> <th>播種時期</th> <th>目標苗立ち本数</th> <th>条間</th> <th>中耕培土作業</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>6月中旬～下旬</td> <td>25本/㎡程度</td> <td>30～40cm (地域慣行の半分とする)</td> <td>省略する</td> </tr> </tbody> </table> <p>2 作業体系図</p>  <p>3 労働時間 (1) 大豆葉による遮光により抑草効果が期待でき、手取り除草時間を短縮できる。 (2) 10 a 当たり労働時間は晩播慣行栽培の59%である。</p> <p>4 収量性 晩播慣行栽培に比べ最下着莢高が高いため、コンバインによる全刈り収量は3か年平均で118%である。</p> <p>5 生産費 晩播慣行栽培に比べ10 a 当たり98%、60kg 当たり87%である。</p>			播種時期	目標苗立ち本数	条間	中耕培土作業	6月中旬～下旬	25本/㎡程度	30～40cm (地域慣行の半分とする)	省略する
播種時期	目標苗立ち本数	条間	中耕培土作業								
6月中旬～下旬	25本/㎡程度	30～40cm (地域慣行の半分とする)	省略する								
期待される効果	<p>1 6月中旬～下旬播種で増収が期待できる。</p> <p>2 大豆の作付規模の拡大が期待できる。</p>										
利用上の注意事項	<p>1 中耕・培土を行う栽培法に比べてやや倒伏しやすい。地力が高く、5月下旬播種の地域慣行栽培でも倒伏することが多い圃場では避ける。</p> <p>2 条間30cmから40cmでは、大豆葉による遮光は同程度である。</p> <p>3 雑草の発生が多いと見込まれる圃場及び排水不良の圃場では避ける。</p> <p>4 播種後に広葉雑草の発生が多い場合やベンタゾン液剤の効果が低い雑草の発生が見られる場合は、大豆を1条とばして中耕・すき込みし、地域慣行の条間にして管理する。その際、出芽18～27日後のすき込みで2～3割減収する。</p>										
問い合わせ先 (電話番号)	農林総合研究所 作物部 (0172-52-4396)	対象地域	津軽地域								
発表文献等	平成22～25年度 試験成績概要集 (農林総合研究所)										

【根拠となった主要な試験結果】

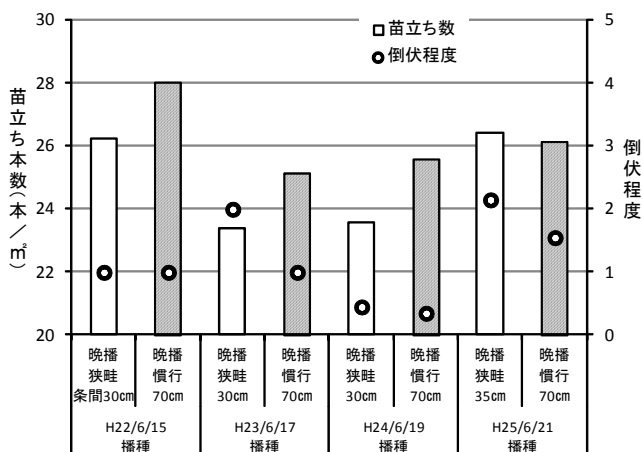


図1 苗立ち本数と倒伏程度 (平成22～25年 青森農林総研)
(注) 倒伏程度 0：無～5：甚の6段階評価

表1 労働時間 (平成22～25年 青森農林総研)

作業	人数	労働時間(人・時間/10a)	
		晩播狭畦	晩播慣行
前年秋耕起	1	0.5	0.5
弾丸暗きよ	1	0.1	0.1
改良資材施用	2	0.3	0.3
事前耕起	1	0.5	0.5
施肥同時播種	2	0.6	0.6
除草剤散布	1	0.2	0.1
中耕培土	1	-	0.6
病虫害防除	1	0.1	0.1
収穫	2	0.6	0.6
手取り除草	1	0.8	2.9
合計		3.7	6.2
慣行対比(%)		59	100

(注) 各作業の実施年数及び調査年数の平均。

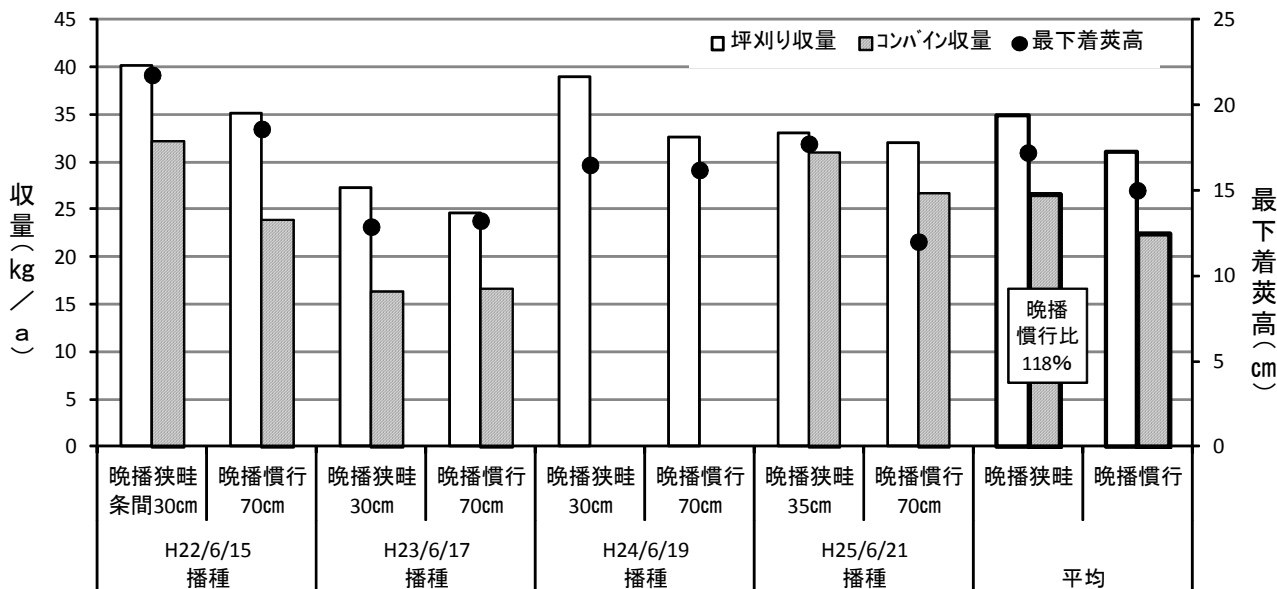


図2 収量及び最下着莢高 (平成22～25年 青森農林総研)

- (注) 1 最下着莢高：大豆地際からの高さ。
2 苗立ち数及び倒伏程度：図1に同じ。
3 施肥窒素量：各年次とも基肥3kg/10a、追肥なし。
4 平成24年のコンバイン収量はデータなし。

表2 生産費 (平成24～25年 青森農林総研)

区名	収量 (kg/10a)	物財費(円/10a)							労働費 (円/10a)	生産費	
		種苗費	肥料費	農業薬剤費	光熱動力費	農機具費	その他	計		(円/10a)	(円/60kg)
晩播狭畦	300	4,433	6,722	7,730	1,375	19,306	17,589	57,155	2,648	59,802 (98)	12,070 (87)
晩播慣行	268	3,929	6,949	6,384	1,863	19,790	16,805	55,720	5,379	61,099 (100)	13,802 (100)

- (注) 1 平成24～25年の2ヵ年平均値
2 種苗費、肥料費、農業薬剤費、光熱動力費、農機具費は試験での結果を基に算出。試験で得られないものは、「主要作物の技術・経営指標」及び「平成23年産大豆生産費(東北)」を参考に算出した。
3 労働費は1,260円/時間、収量はコンバイン収量に障害粒率を差し引いた数値、単価は113円/kg
4 農機具費は20ha規模(水稲12ha、大豆8ha)と想定して按分した。